2016年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

本学会（日本福祉教育・ボランティア学習学会）の名称にある、「ボランティア学習」という言葉を初めて見たとき、この語にどういう意味が込められているのかよくわからなかった。今でもカン違いしているかもしれないが、私なりに、「ボランティア経験を通して学ぶ」というふうに読みなおして、その教育学的な検討をすることにしたい。

「ボランティア経験を通して学ぶ」という事象（以下「ボランティア学習」と表記）はたしかにあると思うが、それは私にいわせると、可能性と危険性の両方を持っている。

第一に、ボランティア学習は、世界を開くこともあるし、世界を閉ざすこともある、という両義性を持っている。

ボランティアを実践する者は、実践しなかった場合の自分に比べると、確かに新しい経験によって世界が広がることになる。自分にとって新しい場に足を踏み入れる。出会わなかったはずの他者に出会う。知らなかったスキルを身につける。だから、ボランティア経験を通して、スキルやノウハウが広がり、人間関係やネットワークが広がり、人間や社会について、より幅広い理解ができるかもしれない。

しかしながら、ボランティア学習は、対面関係的な世界に自己を閉ざして、別の認識、別のノウハウ、別のネットワークの可能性を封じてしまう可能性もある。

『「公共性」論』（二〇〇八年）という本の中で、稲葉振一郎は、私たちには三つの世界があると述べている。

一つ目は「自然」である。自然法則に従うので、自然は人間の手にはどうにもならないことだ。自然法則を人間は変えることができない。しかし、そういう自然法則の世界がゲンゼンとしてある。

二つ目は「生活世界」である。家族、友人、近所付き合いといった対面的な関係の生活世界があり、これは自分の力で変えられる。妻とけんかしても、自分の気持ちを切り替えたら関係を修復できることがある。友だち関係も同様で、自分の努力で変えられるのが生活世界である。

稲葉に言わせると、三つ目の世界として「社会システム」がある。たとえば、法律、制度、社会インフラは社会システムである。人間が作り出した社会の仕組みの領域である。しかしながら、奇妙なことに、この社会システムは、人間が作っているにもかかわらず、普通の人は、往々にして、自分では変えられない世界、[5]与件だと思ってしまう。

稲葉は、この社会システムに対する認識やかかわりこそが公共性だ、と述べている。「「社会システム」は、個人あるいは私人としての人間にとっては「自然」と変わりない絶対的な与件であっても、集団として、あるいは公共的存在としての人間にとっては必ずしもそうではない。〔……〕「社会システム」のこのような両義性への自覚が人々に共有されること、「社会システム」と「生活世界」の間に緊張関係が感受されることが、「公共性」であるわけです」。

この議論を手がかりにすれば、ボランティアが「生活世界」に閉じこめられていく隘路(あいろ)もあるのではないかということである。災害復興で、被災者とは親密な関係をつくるのだが、原発を作り出してきた社会の仕組みはまったく視野に入らない、といった状況を考えてみればよいだろう。そこでは、相互対面的な関係にとどまるボランティアを通した学習は「共同体」的つながりの範囲に閉じこめられていて、多様な利害や価値が衝突し、民主主義的な討議や熟慮を必要とする公共的な空間には触れていないことになる。

[6]「社会システム」と「生活世界」との間の緊張関係を意識しないと、相互対面的な関係での学習を、そのまま手放しで公共性と結びつける議論になってしまう。たとえば、関嘉寛にいわせれば、ボランティアは「未定型な公共性に関わる」活動である。「未定型な公共性」とは、「誰に対しても「開かれている」ということ」であり、「個人の選択に対して開かれていること」である。ボランティアは自ら選択して、活動に関わっていく。それは、「プロセスとしての自己のアイデンティティを作り上げていく、そしてそのアイデンティティが成立する他者関係を顕在化させていく、さらにはそのような関係性の連鎖としての社会のあり方へ影響を与えるという意味で、広い意味で政治参加していくことができる」ものだ、という。しかしながら、そうした直線的な認識の拡大・深化がすべてのボランティアに起こるとは私には思われない。むしろボランティアとしての関わりの部分性や一時性を考えるならば、眼前の個別具体的な関係性から自己に内向したり、関係それ自体の充実で満足したりしてしまうことが

多いのではないだろうか。

視点を換えてこの問題を捉えると、「経験から学ぶ」ということの狭さという、[7]教育学的な限界の問題とも関わっている。近代学校は、「文字を通した学習」を制度化することによって、日常生活の外側にある広い世界を縮約して「再提示」する教育を制度化してきた。「全世界の手短な概念」を『世界図絵』（一六五八年）で子どもたちに学習させようとしたコメニウスの企図が典型的であるように、それは、日常の経験的な世界の外側にある広がりを学ばせようとするものであった。だからこそ、狭い日常世界にとどまる子どもたちにとっては、しばしば疎遠で無意味に映ったりするのだが、逆に、狭い日常生活を超えた視野や知識を身につけることにもなるのである。

「社会システム」を可変的なものととらえるためには、「生活世界」の外側にある「社会システム」についてさまざまな概念を把握し、それを組み合わせて思考し判断することが必要になる。「経験から学ぶ」というのは、もしもそのような「文字を通した学習」とうまく結びつかない場合には、稲葉のいう「生活世界」の中だけで完結した狭い学習の回路を生み出しかねない。自分の経験を絶対視したり発想や視野が狭かったりする個人を生み出してしまう、ということである。個人にとって、経験から学ぶ度合いが多い場合には、ボランティア学習についても、どういう活動に[8]携わるかという初期の選択によって、その後の世界認識の仕方が左右されてしまうことも起きかねない。活動に深く関われば関わるほど、狭い人間関係と限定的な経験が、思考や判断の枠組みを限定してしまうような事態である。

第二に、ボランティア学習は、個人にとって自律と従属の両義性を抱えている。これは、「教育」と「学習」のちがいの問題に関わっている。

「教育」は教育をしようとする主体があって、その主体が目的や目標・手段を選択して、学習経験をさせることになる。つまり、教育するというのは、プログラム化されたものの経験である。そこでは何がどう学習されることが望ましいのかが、あらかじめ設定されている。

しかし、「ボランティアを通して学ぶ」というのは、その学習過程は、学習者（＝個々のボランティア）の偶発的な経験に依

存することになる。すると、いったい何をどう学ぶのかは誰にも制御できない。何も学ばないかもしれないし、学んでほしいこととまったく違うことを学ぶかもしれない。「教える―学ぶ」という関係をとらない場合には、「学ばない」という結果をショウライ[9]するリスクも大きいのである。ボランティアの経験から、「人間は皆平等だ」という人間観を学習する者もいるかもしれないが、逆に、「人間には賢い者・強い者と、愚かな者・弱い者がいて、その序列はどうしようもない」といったことを学習してしまう者がいるかもしれない。

そこで、しばしば、ある教育的な意図を忍び込ませて、ボランティアがソウグウ[10]する経験をあらかじめ水路づけておくといったことがなされる。「ボランティアを教育する」というだれかの意図が反映することになるわけである。

もしもその水路づけがうまくいって、ボランティア経験を通してみんなが同じことを学習したとしたら、これはこれで厄介かもしれない。自発的なボランティアを通して、だれかの意図通りに社会化されてしまったことになるからである。

ボランティアへの参加は、通常、自発的なもので、それは「自律した主体による選択的行為」として想定されているものである。にもかかわらず、ボランティア経験の中でだれかの意図通りの学習・社会化がなされているとすると、それは、「従属する主体」[11]を作り出していることになる。自発的で拘束されないはずのボランティア参加者が、教育の対象となるとすると、そこには隠れたパターナリズムが作動している。不必要だとは思わないが、教育化やプログラム化には、「どこまで許されるのか」という線引き問題が存在しているように思われる。

問題点はもう一つある。ボランティア経験が教育プログラム化されてしまう度合いが高いほど、固有の世界認識の仕方を共有するものに向かいがちなはずである。誰もが同じ「気づき」に向かって、実践が組織されるからである。だから、少し前に述べた、「経験から学ぶ度合いが大きい場合には、ボランティア学習についても、どういう活動に携わるかという初期の選択によって、その後の世界認識の仕方が左右されてしまうことも起きかねない」という点が、ここでも問題になる。

この点が懸念[12]されるのは、特に、一元的なプログラムが押しつけられる場合には、市民社会の多元性を弱体化させてしまいかねないからである。「共同体」を志向するコミュニタリアン（共同体主義者）の議論を斥(しりぞ)けて、多元的な市民社会の活性化を唱

えるバーバーは、市民社会を支える舞台の一つとして、「コミュニティへの奉仕」の学習を提起している。たしかに分権的で価値多元的な社会であるアメリカでは、それは多元的な市民社会へのよい仕掛けとして機能するかもしれないけれども、中央の統制が強く「共同体」的な志向が強いのが日本なので、この議論をそのまま持ち込むのには慎重でなければならない。

ボランティアの経験から何かよいものが学習されることはある。それはその通りである。しかし、学習の [(13)] できなさによって、その過程は常に不確実である。だからといって、その不確実さを減らすために教育的な意図によるプログラム化がなされる場合には、「自発的な主体」であったはずのボランティアは、「教育的なまなざしに従属する主体」の圏域に閉じこめられてしまうのである。

（広田照幸『教育は何をなすべきか』による）

注　コメニウス……ボヘミアの教育思想家（一五九二～一六七〇）。イラスト入りの子ども向け教科書『世界図絵』を著す。
パターナリズム……父親が子どもに指図するように、当人のためだということを理由として過度に干渉すること。

〔問一〕　傍線(1)(4)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　傍線(8)(12)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(2)「可能性と危険性」とあるが、左の中で、筆者の考える「可能性」の説明として適当なものにはA、「危険性」の説明として適当なものにはB、そのいずれにも該当しないものについてはCの符号で答えなさい。

ア　日常の経験的な世界を超えた広い世界を書物を通じて学ばせるという近代の学校制度のあり方を覆す。

イ　ボランティア活動の中での具体的な人間関係に充足してしまい、広い視野や知識を身につける機会を逃す。

ウ　個人的な経験を通じて自分なりのものの見方を確立し、その見方に強く固執するようになる。

エ　対人関係でどんなトラブルがあっても、自分の気持ちを切り替えることで人間関係を修復できることを学ぶ。

オ　これまでの人生では出会えなかったような人たちと関係を結ぶことで、人間や社会についての幅広い見方を持つ。

〔問四〕 傍線(3)「世界を閉ざすこと」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　自分が関わっている日常世界の現状に満足し、そのあり方を変更することに強い抵抗感を感じること。

B　自分が築いた親密な人間関係を何にもまして大切に思い、その背後にある広い世界に目を向けないこと。

C　多様な利害や価値が衝突している公共性を目の当たりにして、そうした問題に関わることを拒否すること。

D　自発的に参加した活動を通じて、知らず知らずにある人の特定の意図に沿った考え方をするようになること。

E　ごく親しい身の回りの人々としか対面的な関係をもてなくなり、社会的な活動への参加を拒否するようになること。

〔問五〕 傍線(5)「与件」にもっとも意味の近い語を左の中から選び、符号で答えなさい。

A　関与　　B　供与　　C　参与　　D　所与　　E　天与

〔問六〕 傍線(6)「「社会システム」と「生活世界」との間の緊張関係」とあるが、なぜ社会システムは生活世界と緊張関係を生み出すことになるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　社会システムは、公共的存在としての人間が作り出した社会の仕組みであるので、公共性を身につけていない人にはその変革に関与することが許されていないから。

B　社会システムは生活世界と密接に結びついているが、そこでは多様な利害や価値が対立しており、その変革には日常の経験はそのままの形では役に立たないから。

C　社会システムは、法律や社会制度などを通じて生活世界を規制しており、人々は日々の生活の中で知らず知らずのうちに誰かの意思に服従するよう強いられているから。

D　社会システムは実際には可変的なものであるが、そのことに人々が気づくためには、学校教育において書物を通じて、狭い生活世界を超えた視野や知識を苦労して獲得する必要があるから。

E　社会システムは生活世界を超えた近寄りがたい世界であって、人々は生活世界における対面関係の経験を徹底的に反省し深化することによってのみそれを変革することができるものであるから。

〔問七〕 傍線(7)「教育学的な限界の問題」とはどのような問題であるか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　日常生活での思いがけない経験が学習者の意欲を引き出すことがあると分かっていても、教育者がそうした経験の機会を用意するのは難しいという問題。

B　日常生活の中では子どもは具体的な経験に即してしかものを考えられないので、抽象的な概念を通じて世界のあり方を正しく理解することが難しいという問題。

C　日常生活の中での学習に留まっていると、そこから学べることはわずかであるにもかかわらず、その経験から得た世界認識の仕方に固執しがちになるという問題。

D　日常生活で身近な人たちから教わることは学習者にとって説得力があるので、たとえそれが間違っていても、学校教育を通じてそれを正すことは難しいという問題。

E　日常生活の外側の広い世界について書物を通じて学ぶことは子どもには無意味なことと思われがちなので、教育者が子どもの視野を広げることには困難を伴うという問題。

〔問八〕 傍線(11)「従属する主体」を作り出していることになる」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　ボランティア学習では、学習者にどういう活動に携わらせるかという教師のプログラムが不適当だと、学習者の世界認識は不確かなものになってしまい、無批判に他人の意見に従うようになる。

B　ボランティア学習に参加する者は主体的な選択に基づいて学習することを望むが、社会経験がとぼしい学習者は社会の現実に対処できないために、先達の指導に従うことの重要性に気づくことになる。

C　ボランティア学習では自発性に基づいて学習することが期待されるけれども、学習者が教師の意図に沿って学習するように教師が活動内容を細かくコントロールすると、自発性が損なわれることになる。

D　ボランティア学習では、学習者が主体的に学習の目的や目標・手段を選択するけれども、学校のコントロールを離れた学習者は結局、自身にはどうにもコントロールできない偶発的な状況に身を任せることになる。

E　ボランティア学習ではあらかじめ用意された世界認識を共有していなければ何も学ばなかったり危険な考えをもったりするリスクが高まるため、自発的な選択に先立って、学校教育での書物を通じた学習が重要である。

〔問九〕 空欄(13)に入れるのにもっとも適当な二字の語句を、本文の三ページから四ページの中から抜き出しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

英語だと「ライフ」のひとことで済んでしまうことに、日本語ではコンテクストに従ってそのつど適切な言葉を充てなければならない。ひとの「一生」だとか「生涯」とか「人生」とか、「生活」や「暮らし」あるいは「なま」とか「現物」とか「生き物」とか、「寿命」とか「いのち」とか……。それでも、このうちどの言い方も「ライフ」のもつ一般的で抽象的な概念を表すのになじまないというので、「生」とか「生命」といった訳語が使われる。この事情は、英語だけでなくフランス語との間でも同様である。

日本語のなかで暮らしていると、具体相に見合った表現の方がなじんでいるから不自由はないが、こうして較べてみると日本語とはなんとも面倒な言語ではある。いっそのこと「ライフ＝生命」としてすべてをこの一語で済ますことにしてみてはどうだろう。「波瀾万丈の生命」、「(1)生命の曲がり角」、「失業して生命に困っている」、「伝統的な生命様式を守る」、「(2)生命が尽きた」……。だいたいこれでやってやれないことはない。「彼は全(3)生命を科学に捧げた」などという場合は、ひょっとすると誤解を生みかねないが、それが人体実験に入れあげたという話ではないことは、コンテクストから明らかになるだろう。最近、小説の大胆な現代語訳をめぐっていろいろ議論もあるようだが、「ライフ」を一律に「生命」と訳しても、どうやらあまり不都合はないようだ。

とはいえ……、なかなかそうはならないのは、「生命」の語で示されるものと「いのち」で言い表されるものとが、どうも微妙に違っているということを、日本語の話者は感じてしまうからだ。

「生命」は「生命現象」などとして観察や研究の対象になったりするが、「いのち」は愛でるとか粗末にすることはあっても、研究の対象にはなりにくく、「いのちの探求」と言ってみても何のことかよくわからない。そして「生命科学」と言えば、二一世紀にもっとも注目される新たな知のフロンティアとされているが、「いのちを科学する」などと言うと、ミスマッチの興をねらったテレビ番組のタイトルぐらいにしかなりそうにない。

この違いは、みもふたもなく言ってしまえば、西洋的な抽象概念と日本語の実感的表現の違いである。それは無視しようと思えばできないことはないが、同時に越えがたい溝でもある。抽象概念は科学や哲学となじみがよいが、実感的表現は日常感覚に溶け込んでいる。では、科学で言うところの「生命」と、日常的に言う「いのち」とは同じなのだろうか、違うのだろうか。

「生命科学」の教科書をひもといてみる。最初に「生物」の定義が出てくる。細胞でできていて、DNAで自己を複製するとか、環境からの刺激に応答するとか、エネルギー代謝をするとかいったことだ。それからこの定義の項目にしたがって、まず細胞の構造の説明と、ついで生体を構成するたんぱく質の話があり、そしてDNAの構造とその働き方へと記述が進み、亀甲型の化学式や有名な二重螺旋(らせん)の図、それに内燃機関や工場の排水経路のような図が並んでいる。たいていは分子レヴェルの話か、せいぜい細胞レヴェルの話だ。最後に生殖のところにきて、はじめて器官レヴェルの簡略化した図が出てくる。つまり花の受精図だ。

なるほど、「生命」とはこういうものか、とある種の感慨[4]をもって思う。最近の生命科学の急速な進展で、いまでは免疫のメカニズムについても、遺伝子の発現のプロセスについても、驚くべき細部まで研究が進んでいる。そしてその成果が、病気の治療や予防などに応用されている。

けれどもその一方で、そのように研究される「生命」とは、ひとが生きる「いのち」とはやはり違うのだろうという印象は拭えない。病気になれば医者にかかり、生理学的な観点からはこれこれの支障が生じているから、それに対してどのような処置をして病気を治すのだといった説明を受け、それを納得して治療を受けるのだが、ひとは分子レヴェルあるいは細胞レヴェルの「生命」を生きているわけではない。生きているのは、そう言ってよければ「ひとつのいのち」なのである。

医療の現場にはいつも大きな困難がある。とりわけいまの日本では医療体制や保険制度の危機、病院の医師不足や訴訟問題など、多くの困難を抱えて「医療の崩壊」さえ語られている。けれどもそのような社会的状況のなかでも、医師や看護師などの医療関係者はさらに本質的な問題にも直面している。というのは、この「生命」と「いのち」のギャップが医療の現場でせめぎあうからだ。現在の医学や医療技術は「生命科学」をベースにしている。生命科学はいわゆる生命現象を物理化学的に解明しうる

ものとして研究する。ところが医療現場が相手にしなければならないのは、つまるところ一人ひとりの「いのち」である。西洋語の世界ならその間のギャップはそれほどあらわにはならない。というのはそこには「ライフ」の一語しかなく、「いのち」は科学の対象の「生命」といわば地続きだからである。けれども日本語では「生命」とは違う感触をもつ「いのち」が生きている。その分だけ医療は剣呑(けんのん)(5)な問いに直面しなければならないが、いまのところその二つをつなぐ理論も思想もない。とはいえ、それが人間にとって不幸な状況なのかどうかはわからない。むしろそれは人間にとって真に問うに値する問いであるかもしれないからだ。

「生命科学」の進展は、主として先進諸国（つまり西洋やそれに同化した諸国）の政策的誘導によるところが大きい。その政策を促す主要な要因は、研究や医療そのもののためというより、むしろ将来の経済的・技術的優位を国家規模で確保しようとする知的開発におけるヘゲモニー追求である。そしてその背後には科学の「全能性」に関する思い込みや、人間の「進化」の扉を開いているといった、それ自体盲目の信仰にも似た思い込みもある。そんな疑念にふと立ち止まらなければならないのは、「いのち」のような言葉をもってしまったたぐいの人間の、不都合というよりはむしろ僥倖(ぎょうこう)(6)であるかもしれないのだ。

（西谷修『理性の探求』による）

注　ヘゲモニー……主導権。指導的な地位。

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)「生命」を、それぞれ日本語の表現としてより自然な語に置き換えるとすればどうなるか。もっとも適当な語句の組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (1) 一生 (2) 人生 (3) 生涯
B (1) 一生 (2) 寿命 (3) 人生
C (1) 寿命 (2) 生涯 (3) 人生
D (1) 人生 (2) 生涯 (3) 寿命
E (1) 人生 (2) 寿命 (3) 生涯

〔問二〕 傍線(4)「ある種の感慨」とあるが、それはどのような思いか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 生命を考える上で重要な生殖の仕組みを植物の器官図によって説明する教科書の方針に、納得のいかない思い。
B DNAの構造や機能まで解明した生命科学の進展を誇りに思いながらも、科学万能主義の暴走を危惧する思い。
C 生物を分子や細胞のレヴェルで捉える科学の視点が日常の感覚からあまりに懸け離れていることに、驚く思い。
D 生物という複雑な存在について考えるにあたり徹底的に分析して捉える科学的思考の明晰(めいせき)さに、感心する思い。
E 生物の複雑な仕組みを二重螺旋や内燃機関を模した図などにより抽象化して説明できることに、感動する思い。

〔問三〕 傍線(5)「剣呑な問い」とあるが、なぜ「剣呑」と言えるのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 科学的に「生命」が尽きたと判断されても「いのち」は存続しているという厄介な状態が生じ得るから。

B 科学的な専門知識を持たない患者に治療方針を説明しても、正しく理解されないおそれがあるから。

C 「ライフ」にどの訳語を充てるかについて、医療関係者と患者の間で意見の相違があるから。

D 医療現場は生命科学だけに依拠するのではなく、生命倫理の見地を取り入れるべきだから。

E 医療関係者の科学的見地と患者の実感とに折り合いをつけることは、至難の業だから。

〔問四〕 傍線(6)「僥倖であるかもしれない」とあるが、筆者はなぜそのように考えるのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 多様な語彙を持つ日本語の話者は、西洋先進諸国主導による生命科学の進展が、実は知的開発におけるヘゲモニー追求の産物であったと気づくことができるから。

B 日本語で思考する場合、人の生をめぐる科学的立場と日常感覚の衝突が顕在化しやすいが、そのおかげで生命科学の在り方を問い直す機会があるから。

C 生命科学の研究は西洋的な抽象概念によって成立しているため、日本の科学者は西洋的概念と日本語の実感的表現の板挟みになるのが宿命だから。

D 日本の生命科学研究は「いのち」と「生命」という二つの語のはざまで西洋諸国に後れをとったが、生命倫理の分野では有利な側面があるから。

E 日本の生命科学研究は科学の全能性を信頼できずにいたが、そのせいで西洋諸国との知的開発競争で後れをとったことは国家的な損失だから。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

道信の中将の(1)、山吹の花を持ちて上の御局といへるところを過ぎけるに、女房たち、あまたゐこぼれて、「さるめでたき物を持ちて、ただに過ぐるやうやある」(2)と言ひかけたりければ、もとよりやまうけたりけむ(3)、

くちなしにちしほ八ちしほ染めてけり

といひて差し入れりければ、若き人々(4)、え取らざりければ、奥に伊勢大輔がさぶらひけるを、「あれ取れ」と宮の仰せられければ、うけたまひて、一間が程をゐざり出でけるに思ひよりて、

こはえも言はぬ花の色かな(5)

とこそ付けたりけれ。これを、上聞こしめして、「大輔なからましかば、恥がましかりける事かな」とぞ仰せられける。これらを思へば、心疾きもかしこき事なり。心疾く歌を詠める人は、なかなかに久しく思へば(6)、あしう詠まるるなり。心[(7)]詠み出だす人は、すみやかに詠まむとするもかなはず。ただ、もとの心ばへにしたがひて詠み出だすべきなり(8)。

（『俊頼髄脳』による）

注　道信……藤原道信。平安中期の歌人。　上の御局……后妃が常の局のほかに天皇の御座所近くに与えられていた部屋。
くちなし……山吹に似た黄色に染まる染料。　ちしほ八ちしほ……「しほ」は染色時に液に浸す回数を表す語。
伊勢大輔……平安中期の女房歌人。　宮……中宮彰子。　一間……柱と柱の間一つ分の距離をいう。
上……主上。一条天皇。

〔問二〕 傍線(2)(6)(8)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(2) 「さるめでたき物を持ちて、ただに過ぐるやうやある」

A さきほどのお祝いの花を持っているのに、それを見せずに通り過ぎるおつもりでしょうか

B 世間で評判になっている貴重な花を持っているから、すぐに通り過ぎようとなさっているのでしょうか

C そのような珍しい花を持って、さっさと通り過ぎないといけない用事がどこにおありなのでしょうか

D そんなに素敵な花を持っていて、そのまま通り過ぎるようなことがあっていいのでしょうか

(6) 「なかなかに久しく思へば」

A かえって長時間考えると

B むしろずっと考えているので

C 思ったよりも長く考えると

D ほとんど長く考えないので

(8) 「もとの心ばへにしたがひて」

A 基本的な心構えに従って

B 当初からの計画に叶うように

C その人本来の心の働きにまかせて

D もともと自分が考えていたように

〔問二〕 傍線(1)「の」と同じ用い方をしている「の」（各文中の傍線で示してある）を左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 見ては、うち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。

B このごろ世にあらむことの、少しめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせ給へ。

C 女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿かならず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。

D 惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしがな

E 草の花はなでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。

〔問三〕 傍線(3)「もとよりやまうけたりけむ」は、語り手が推測を述べたところである。その推測した内容の具体的な説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 道信が、もともと女房たちにあげようとして、花を持って歩いていたのかということ。

B 道信が、あらかじめ女房たちの反応を予想して、歌の上の句を準備していたのかということ。

C 道信が、退出してきた御所から、わざわざ山のように山吹の花をもらったのかということ。

D 女房たちが、退出してきた道信が御局の前を通ることを知って、待機していたのかということ。

E 女房たちが、もともと道信がきざなことを知っていて、恥をかかせようとしたのかということ。

〔問四〕 傍線(4)「若き人々、え取らざりければ」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 若い女房たちは、目の前で繰り広げられた道信の突然の求婚にとまどってしまっていたから。
B 若い女房たちが差し入れられたものを受け取るには、女主人の許しが必要だったから。
C 若い女房たちには、道信の野蛮な振る舞いが到底許しがたかったから。
D 若い女房たちには、道信が何の目的で差し入れてきたか理解できず、皆警戒したから。
E 若い女房たちは、道信の詠みかけた歌に下の句をとっさに付けられるほど機転が利かなかったから。

〔問五〕 傍線(5)「こはえも言はぬ」という表現を、伊勢大輔が歌の下の句に用いたのは、どの表現と呼応させているからか。文中から五字以内で抜き出しなさい。

〔問六〕 空欄 (7) に入る形容詞としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A うつくしく　B 多く　C よく　D 遅く　E ゆかしく